



スイーツ



アイスランド

松本 あずさ

↑

最悪な街、東京からの脱出

「何これ！？ダサッ！！」

期待で高鳴る胸に連動するように震えた私の指が、そっと箱を開けた。そこには私が二番目に欲しかったパンプスが高級ブランドの布の袋から自信たっぷりに顔を覗かせていた。

場と不釣り合いな大声に、タキシードやドレスで精一杯着飾った周りのお客さん達が訝しげな表情でこちらを見たが、すぐに興味を無くして自分達のとびきりの夜に戻っていった。

口を思いっきり尖らせ、背もたれに乱暴にもたれかかった。足を組み、店内を見渡す。隆一の背中越しに真っ赤なドレスを着た黒髪の女が、店内の中央でグランドピアノを一心不乱に演奏している。ふと視線を横にやると、窓からは大都会のビル一つ一つが小さく輝き、宝石の海のように広がっていた。さすが東京一のホテルのレストラン、外を見ているだけでも心が癒されるような気がする。

けれどもどれだけ宝石箱を見ながら待とうとも、肝心の隆一は黙って下を向いたままこちらをみようともしない。

「もうっ、仕方がないな」

隆一に聞こえるように呟いた。男ってプライドの高い生き物だからね、今回だけは許してあげろ。そう思い隆一の方を見ながらほほ笑んだ。

「プレゼントは最悪だったけれど、レストランの雰囲気はまずまず合格かな」

すると隆一は、久しぶりにご飯がもらえた犬のように顔を上げ、私の手を取る。

「尚、ごめんな。俺って気が利かなくて……プレゼントまた買い直そう。今度は鞆も一緒にプレゼントするからね」

という答えが返ってくるはずだった。

ピアノが急に止み、一瞬レストランに静寂が訪れ、次の瞬間、再び激しい音を出して店内に響いた。隆一は急に私の手に握りしめられていたプレゼントの箱を奪いとった。何があったかわからず、隆一の顔を見ると、今まで見たこともないような怖い顔をしている。隆一、一体どうしたんだろう。

「お前にはもう付き合いきれない！」

隆一は大声でそう叫ぶと、乱暴にプレゼントを床へと投げ捨てた。パンプスは手榴弾のような大きな音を立て、箱から出て左右それぞれが好き勝手な方向へと飛んでいった。そして隆一はパンプスも私の事も振り返ることなく、ゆっくりとレストランを出ていった。

しばらく何が起きたか理解ができなかった。相も変わらずピアノだけが店内に穏やかに流れている。けれども私は他のテーブルの人達の冷たい視線で、すぐに我に返ることができた。男に暴言を吐かれ、プレゼントを投げつけられ、先に出て行かれるなんて。

ありえない。

ここにはもういられない。下に転がっているプレゼントを掴むと逃げるように入出口に向かった。

「お客様、お忘れ物でございます」

執事みたいな年配の男の人の前を通りすぎようとした時、優しい笑顔で呼びとめられた。足をとめると、有名ブランドの香水の香りがする木製の小さなボードを手渡された。中をおそるおそる見ると、真っ白な紙に0が沢山ついている数字が書いてある。執事のほうを見ると、ヤクザのような怖い顔をして私を見ていた。

仕方がなくボードをレジへと渡すとあまりの値段に思わず声のでてしまった。

「八万円！」

人生最低最悪の夕食。何にも食べてないのに、私の一か月の給料の半分以上支払うはめになってしまった。

地下鉄を降り、駅から道路へと続く階段を登りきると、地上は日中とはうってかわって、暗く静まり返っていた。車どころか人さえ一人も歩いていない。スマホをチェックしたけれど、誰からも何のアクションはない。大きな息をゆっくり吐きながら、線路沿いの暗い坂道をトボトボと歩いた。

クレジットカードがあったおかげで、なんとかお店からでることができたけれど、もし私が持っていなかったら隆一はどうするつもりだったのだろう。隆一って人のこと考えられないの？考えれば考える程、イライラが募る。

「私のことこんなに歩かせて、ばっかじゃないの！」

地球上の全員に聞こえるくらいの大声で叫んだけれど、地球上には誰もいないようだ。すぐに横を走ってきた快速電車の音にかき消されてしまった。

何回見ても私の真っピンクに装飾されたスマホはびくともしない。そのうちに青いマークが目印のコンビニが見えてきて、右に曲がると私のアパートが見えてきた。

「もうすぐ家に着いちゃうじゃん……」

しびれを切らし隆一の携帯にかけた。私がこれだけひどい目に合っているのに、隆一はどこで何をしているのだろう。

「もしもし、隆一！？私のタクシーは！？」

隆一の携帯のはずなのに無機質なアナウンスが延々と繰り返されているだけだった。

隆一……。

一台の車が私の横を猛スピードで通りすぎて行った。

スマホのホームボタンを押して電話のアプリを閉じた。ホーム画面は甘島の写真。いつみても息をのんでしまうような、綺麗なエメラルドグリーンのに、コバルトブルーの真っ青な空が広がっていて、近くに生えている植物のグリーンがとてもいい味を出している。この世の楽園、

もう一度行きたい。

今年の少し早めの夏休みのことだった。付き合っ一年目の記念日に隆一が甘島に行きたいと言い出した。

「甘島？」

「そう。俺小さい頃にテレビで見てからさ、ずっと行きたかったんだよ」

「……ふうん」

それでも興味がなかなか沸かない私に、隆一はパンフレットを広げて見せながら言った。

「沖縄の本島から高速船ですぐなんだよ。ほら見ろよ、この海！ここで尚と二人で遊んで俺きつと幸せだよ。ねえ尚、駄目？」

猫のように甘えてくる隆一の顔を見ていたら不思議と一度くらいなら行ってもいいような気がしてくる。

「もう！仕方がないな！」

甘島は想像以上の場所だった。高速船を降りるとエメラルドグリーンの海に、のどかな風景。ホテルへと続く一本道の道端は、さとうきびが浜風にふかれてゆらゆら揺れていた。甘島では、とにかく海で泳いで、疲れたら砂浜に上がり空を見ながら休む、そしてまた泳ぐ。夜は空には満天の星空が広がっていた。太陽も沈み、真っ暗な浜辺に寝転びながら隆一は言った。

「俺、会社定年したらここに住もうかな」

「えーえええっ！！ヤダ！旅行に来るんならいいけど、コンビニもないし、お洋服屋もないし、エステもないし！」

「そこがいいんだよ。お前にはわかんないかもしれないけどな」

「何なのよ！」

フグみたいに頬を膨らませた私の頬を指でつつき、耳元で囁いた。

「星も綺麗だけど、俺には尚の方がきれいに見えるよ」

隆一のキザな顔を見て笑えた。笑いながら見上げた夜空には満天の星空が輝いていた。

けれどすぐに現実が襲いかかってきた。私が今いる場所は甘島でもなんでもなく、木造二階建て築二五年の二〇四号室の前だった。

よく眠れずに朝を迎えた。少し寝ては目が覚めるを繰り返し、朝七時三〇分、ショッキングピンクの目覚まし時計がけたたましい音で鳴った。なんとか目を開けスマホを確認するが、甘島のきれいな海から今にも波がザザーンときそうなだけで、誰からも何も届いていなかった。

大きなため息をつきながら、ショッキングピンク色の机の上に置かれた淡いピンク色の鏡を覗きこむ。窓から入ってくる強烈な日差しが鏡に反射して眩しくてなかなか自分の顔が見えなかった。

「何この顔！！」

よくよく見ると鏡に映っている自分は別人のようだった。目の下には大きなクマができていて、顔はパンパンにはれ、自慢のくっきりとした二重のラインがぼやけていた。慌てて緊急時

のパックを取り出し、リンパマッサージをする。けれどどれだけやった所で状況は一向によくない。

巻きゴテでカールを何回も作ろうとするけれどなかなかうまく決まらない。そうこうしているうちにテレビから朝八時をつげるワイドショーの軽快な音楽が流れた。

「やばい、また遅刻しちゃう……」

いつも遅刻する度に怒ってくる煩い部長の顔が思い浮かんだものの、こんなダサい髪形で、こんな顔で、会社に行くわけにはいかない……。

「仕方ないよね」

「明日から九月一日です。今日は月曜日なので今日からから学校という皆さんも」
テレビでは陰気なアナウンサーが夏の終わりを淡々と告げていた。

「よしっ！」

自分に気合を入れると、お風呂を沸かすスイッチを押した。

「むくみ取り大作戦！開始！」

派遣社員に求められるのは学歴でも、コミュニケーション能力でも、プレゼン能力でもない。若さと外見が何より大切なことだ。誰も口にはしないが、誰もかもが知っている。私は生まれた時から勉強が嫌い、底辺と言われる高校もやっと卒業したぐらいの頭の良さ。けれども、二十五歳、よく人から綺麗だと褒められる私への仕事の依頼は沢山あった。

六本木の有名ビルの中にあることが気に入って決めた今の会社。オフィスを廊下からそっと覗くと、中では相も変わらず皆が皆、忙しく働いていた。

「別に一人ぐらい遅刻したっていいよね」

そっとドアを開けようとしたその時だった。

「一人ぐらいじゃないんだよ。一人だけなんだよ！」

部長の怒鳴り声が私の真後ろに聞こえた。恐る恐る振り向くと予想通り、般若の顔をした部長が立っていた。見つかってしまった、どうして昨日からこんなについていないんだろう。

「もう十時なんだけど。君の勤務時間は午前九時からじゃないのか！」

「……ごめんなさい」

「いや、本当に困るんだよね。これで何回目だ？社会人としての自覚あんのか！」

部長がいつも通り眉毛を釣り上げ、永遠に怒鳴り続ける。

「次に遅刻したら、契約期間まだ三カ月残ってるけれどもう来なくていいから」

「……ごめんなさい」

とりあえず反省している感じを出す為に頭を深々と下げた。こうすると部長の怒鳴り声がどんどん小さくなっていくのを私は知ってる。

「……次はないからね。社会人としての自覚持ってくれよ！」

大きなため息を吐きながら自分の席に座ると、隣の席の伊藤さんが話しかけてきた。

「尚ちゃん、また怒られちゃったね」

「うん、私、昨日眠れてなくて大変だったのに。部長って本当にムカつく」

「そうだね、ところで尚ちゃん今夜こそ飲みに行かない？いいバー見つけたんだよね」

伊藤さんはいつもどおり私の体をしたから上まで嘗め回すようにみた。気持ちが悪くなり、休憩室へと逃げることにする。

「男ってどうしてみんなこうなんだろう」

席を立ちながら小声で呟くと、かみ殺しきれない大きなあくびがでた。

今の会社は六本木にある事の他にもう一つお気に入りのポイントがある。給湯室のお菓子とコーヒーが飲み放題だっていうこと。

ガラスから外を覗くとビルの真下に観光客が沢山見えた。変な洋服着て、パツとしない髪型の量産型の人たちがしきりにうちのビルを背景に写真をとっている。

「何が珍しいんだろう。馬鹿じゃないの。」

そう呟き、コーヒーを注いだカップにミルクを入れようと小さな円筒状の容器を開けようとした。すると蓋には日本の海百選と題して、甘島の海がプリントされていた。下の方には甘島のキャッチコピーSWEET ISLAND が書いてある。

「スイートアイランド」

エメラルドグリーンの海に我慢できずに隆一が走り出し、海に飛び込んだ。透明な水しぶきがばっちりメイクと日焼け止めを塗った顔にかかった。

「ちょっと隆一！」

隆一は私の声も気にせず海に仰向けにプカプカと浮いていた。照りつける太陽も気にせずに気持ち良さそうに目を閉じていた。

「はぁ、天国だ。尚もやってみろよ」

そっと海に入ると、隆一の言うとおりに浮き輪によしかかりながら目を閉じた。目を閉じているのに青い空、白い雲、エメラルドグリーンの海が見えるようだった。波の音が優しく私を包んでくれた。

「本当だ、天国」

机の上のデジタル時計が四時五十五分変わった。その瞬間、カバンを持ちながら席を立ち、大声で叫んだ。

「お疲れ様でした！」

「大西さん！！まだ勤務時間は五分残ってる！！」

遠くで部長がまた怒っている声が聞こえたけれど、そんなの関係なかった。いいじゃない、たった五分ぐらい。スマホをポケットから取り出したけれど、隆一はおろか誰からの何の連絡もなかった。

会社の近くのショッピングビルに寄ってふらふらと目的もなく歩いてみたけれど、ウィンドウに飾ってある華やかな物は私一人の月給をはるかに越えていた。

「今度、隆一に買ってもらおう」

そう言ってショッピングビルを後にした。途中何度も何度もスマホをチェックするけれども相変わらず隆一はおろか誰からの連絡もない。満員の地下鉄からなんとか降り、地上に出ると珍しくまだ辺りは明るい。渋滞の大通りを救急車が大音量で駆け抜けていった。

「もしかして……隆一……事故？」

心配になり、もう一度隆一に電話してみた。けれども昨日と同じ無機質な音声がずっと流れているだけだった。

「あっ！そうだ！」

急に隆一がやっているSNSを思い出した。SNS好きの隆一はしょっちゅうスマホをいじって、何かをつぶやいていた。急いでアクセスしてみる。するとトップページのつぶやきに「俺、ようやくカイホー」と信じられないものがあった。思わず涙があふれ出る。

「カイホーって何なのよ！」

大声で叫んでみたけれど、通りすがりの人は誰も私を振り返ってくれなかった。

夕方、海から引き上げた私と隆一は、宿の迎えの車に乗った。そして、私達が住んでいる東京の話をしていた。

「ワシの息子もこの間から東京に働きに行きたい。自分のやりたい事したいってずっと言うてるんじゃ。……東京は何でもあってうらやましいの。」

「おじい、そんなことないよ。確かに何でもあるけどさ、俺は何でもないこの島の暮らしの方がうらやましいよ」

隆一がそういうと、おじいはさみしそうに頷いた。

「ほら見えてきたわ！ここじゃ」

おじいが急に車を止め、前を指差す。そこにはおもちゃの家みたいな白くてかわいい建物がちょこんとたっていた。綺麗に手入れされた中庭の先には、星砂荘とかかれた手作りの木の看板が控えめに門にかかっている。

「わあ！かわいい。おもちゃの家みたい」

思わず歓声をあげるとおじいが嬉しそうに頷いた。

夕食は星砂荘に隣接した居酒屋でおじいの手作り沖縄料理を食べた。特にデザートの手作り黒蜜がかかったバニラアイスクリームがとってもおいしかった。一口食べると口の中ですぐに解け、さわやかな島の香りがした。

「おいしい！」

思わずそう言うと、キッチンで洗い物をしていたおじいがわざわざ出てきてくれた。

「これは、甘島の名産なんじゃ。黒蜜は女好きやさかい、かわいい女の子にはなおさら甘くなるんや」

「もう！おじいってうまいんだから」

そう言って隆一と二人で笑った。

その日は家に帰ってお風呂に入ると、すぐに眠気が襲ってきた。昨日眠れなかった分を身体は取り戻そうとしていた。

目を閉じた次の瞬間には、もう朝をつげる目覚まし時計が鳴る。時間通り起きたのはいいものの、何もする気がおきなかった。ずっとベッドの上でぼーっと天井を見ていた。

そうこうしていると、次の日も遅刻してしまって、部長からまたしつこくチクチクと言われた。本当についてない。

もう何もかも嫌だ。

休憩室で、コーヒーを飲みながら、隆一との思い出に浸っていた。一目ぼれしたっていきなり薔薇の花束をかかえて会社にやってきたこと、毎日、毎日違う花束を抱えて会社の前で私を待っていたこと……。

誰かが入ってくる音がして慌てて我に返った。

「あーあ疲れた」

「本当」

派遣仲間の祐美と香子の声だった。

「尚見た？今日も遅刻してたね」

慌てて奥の自動販売機の陰に隠れた。

「見た！ワザとらしく落ち込んでるふりなんてしてさ」

「本当、毎日毎日、いい加減にしてほしいよね。あいつのせいで、うちらまで派遣の契約切られたらどうしてくれんのよ」

「もう本当嫌だ。あいつ大嫌い」

「私も！てゆうか知ってる？あいつ前の派遣先でさ、上司とできちゃって、色々騒ぎ起こしたらしいよ。奥さんが会社に乗りに来てさ」

思わずその場に座り込んでしまった。祐美と香子の会話はそれ以上頭に入ってこなかった。

同じ時期に派遣され、時々一緒にランチして仲良しだと思っていたのに。合コンだって沢山誘ってあげたのに。一緒にカラオケに行ったり、カフェに行ったりしたのに。

生まれ初めてできた女友達だと思っていたのに。

東京の人間は信用できない。私も生まれも育ちも東京の人間だけど、でもとにかく東京にいる人間は最悪だ。もう嫌だ。全てが嫌だ。

何年かぶりに声に出して泣いた。幸いなことに休憩室には誰も入ってこなかった。

坂の途中に三件のお土産物屋さんがあった。レンタカーを運転する隆一の肩を叩く。

「ねえねえ、あそこ寄りたい」

レンタカーを路肩に止めて、車から出ると人のよさそうなおばあちがニコニコして出迎えてくれた。

「あらー東京？大都会からわざわざようこそ。ゆっくりして行ってね」

「そうじゃ、さとうきび食べるかいな？」

「さとうきび！？」

驚く私の顔を見て、おばあの一人が嬉しそうに店の奥へ入っていった。

「尚、さとうきびもしらないの？」

「知らないっていうか、知っているっていうか……」

ごによごによとごまかしているとおばあが戻ってきた。

「ほらこれかじってみて」

おばあから手渡された竹のようなものをおそるおそる口に持っていく。

「……あまい！」

「よかった」

その場にいるおばあ達のくしゃくしゃな顔がさらにくしゃくしゃになった。

涙が枯れ果てようやく自分の席に戻ると、コピーしなくちゃいけない資料が山ほどのっていた

。

お腹の底から大きなため息が出る。

「大西さん、お客さんにお茶出して」

部長が隣の会議室から顔を出し、大声で叫んだ。周りの人たちが急かすように冷たい視線を向けてくる。ここにいるみんなが敵のように思えてきた。みんな私のことが嫌いなんだ。

机の横においてあった鞆の中からスマホを取り出した。けれど隆一からの着信はなかった。思い切って隆一に電話をかけてみる。

「この電話番号はおお客様のご都合により」

相変わらずのアナウンスが流れるだけだった。

「大西さん！業務中に携帯使うなんて！何様だ！！」

遠くから部長の怒鳴り声が聞こえる。部署のみんなが私を見ている。みんな私のこと嫌いなんだ。もう嫌だ。

何もかもすべてが嫌だ。全部なくなればいいのに。

スマホのホーム画面を押すと甘島の綺麗な海が見えた。波の音、三味線の音、エメラルドグリーン色の海、カラフルな熱帯魚達……。

「あの海を毎日見ながら暮らしたら、どれだけいいことか。」

隆一がふとつぶやいた一言をい出した。

「大西さん！聞ってるのか！早くお茶！それとその資料、正午の会議に使うから早くコピー！

」

部長の怒鳴り声が遠く聞こえてくる。けれども今この瞬間、私の頭の中であることが決まった

。

「大西さん！どうした？具合でも悪いのか？」

部長がいつの間にか私の隣まで来て、何か言っている。けれどもそんなこともう頭に入らなかった。

きっと大丈夫。隆一がそういうんだから。
あの海が私を呼んでいる。

「部長、私、もう仕事辞めます」

「……あっ!？」

部長が声にならない声を出した。口をあけたまま閉じるのも忘れていた。

「もう私向いてないんです!この仕事も!東京で暮らすことも!私はもっと自分らしくいられる場所に行きます!」

フロアのみんなが啞然としてこっちを見ている。部長が何か言いかけた次の瞬間、私は鞆を掴み急いでオフィスを出ていった。

船が大きな波にぶつかり、船体が上がったと思った次の瞬間、あっという間に落ちた。ただでさえ空気が悪く狭い船内で重力を思いっきり全身で受け止め、ひどい頭痛と吐き気がますますひどくなった。

「前はこんなに揺れなかったのに！」

人が十人くらいしかいない船内に響きわたる声で思わずそう叫んだ。

「姉ちゃん、前って八月じゃろ？ここらへんはな、八月だけは海が落ち着いてて揺れんのじゃ！」

前の席に座っていたおじさんが親切にも教えてくれた。よく見ると飛行機でも一緒だった人だ。東京人っぽい感じだけでも、アクセントが島の人のがする。普段東京で働いていて、島に里帰りするんだらうか。

船がまたエンジンを止めた。大きな波が来るのだ。一瞬、身体が宙に浮き、ガクンと下がった。ダメだ、もう限界。

「ビニール袋が必要な方いらっしゃいますか」

少し顔色の悪い船員さんが柱につかまりながら袋を配りに来た。その後はどれだけビニール袋に感謝してもしきれなかった。

すべてが終わった後、幸いな事に三人掛けの座席のその他の二席はそのまま空いていたので倒れ込むように横になった。

隆一からは何の連絡もないままだ。東京の部屋を引き払う前に一度、隆一の部屋まで行ってみたが、どれだけ呼びかけても隆一は出てきてくれなかった。部屋の電気はしっかりついていたのに。

誰にも会いたくない会社には制服を返したり、退職の手続きの書類を出したりで何度か行く羽目になってしまった。

誰かに何かを言われるかもしれないと心配していたが、誰も私に声すらかけてはくれなかった。私は透明人間かっていうぐらい、目も合わせてくれず、みんな忙しそうに自分の仕事をしていった。

また船がエンジンを止めた。大波が来る。

「はぁ」

声にならない叫び声が口から漏れでたけど、今の私にはどうにもならなかった。次の瞬間身体が再び宙に浮いたような気がする、でもさっきよりは横になっている分、まだ楽。

甘島での仕事は呆気なく、いとも簡単に見つかった。隆一と一緒に泊まった民宿、星砂荘に電話をかけてみると、ちょうど住み込みの人手が足りなくて困っていたようだった。

会社を辞めてから、仕事の手続きや引っ越しの準備であっという間の二週間だった。

二週間の間甘島で着るお洋服を何着か買った。どれも原色の少し派手な物だったけれど、甘島にぴったりのお洋服だった。洋服に合わせた小物を色々買ってうちに元々ない貯金が本当になくなってしまった。残高は四百三十五円、どうやっておろせばいいのかわからない金額だけでも、甘島では住む所、食事付きの仕事だからそんなこと気にしなくてもよかった。

甘島に行けばきっとすべてがうまくいく。

そんな気がしていた。

港を出発して一時間ぐらい経ただろうか、急に船の揺れが止まった。ゆっくりと座席から起き上がり、水しぶきだらけの窓を覗くと、空はどこまでも深い青色で、黒色だった水面はエメラルドグリーンになっていた。

「あっ！着いた……やった……！」

船がコンクリートでできた簡単な造りの港にゆっくりと入っていく。船のエンジンが止まると、船舶会社の人々がロープを停留所の石にグルグルと巻きつけている。今まで無音だった船内に急に三味線の南国っぽい音楽が流れ始めた。

「本日はご搭乗いただき誠に有難うございます。途中揺れの激しい場所がございましたが、お体の調子はいかがでしょう。日本の一番東にあります地球上の楽園、甘島のご滞在をどうぞお楽しみください」

「はい！やった！」

嬉しさを抑えきれなくなり、船内放送に大きく手をあげて返事をする。前の席にいたおじさんが私を見て言った。

「観光客はいいのお」

「えっ？」

次の瞬間、おじさんはもうそこにはいなかった。おじさんを探すと、いつの間にか入口でドアが開くのを待っていた。

外には母親らしいおばあちゃんが扉を開くのを今か今かと待っていた。

まぼろし……？まあいいや。

入り口が開き、南の島のなんともいえないムツとした空気が一気に船内に流れ込んでくる。そう、この空気を私は待ちわびていた。自然と歩幅が大きくなり入り口を目指す。

重いスーツケースを引きずりながら船を出ると、あの日となんらかわりのない、甘島がそこにはあった。かすかに吹く風が潮の香りを漂わせ、身体をリラックスさせてくれる。エメラルドグリーンの海が穏やかに揺れている。九月の半ばだというのに、真夏のように太陽がガンガンと照らしつけ、肌をじりじりと焼いている。

この日にの為に貯金の残金を使って買ったお気に入りの洋服、マキシワンピースにマローのサンダルを履きいている。思いっきり手を広げ、甘島の空気をたっぷり吸い込み、大声で叫んだ。

「甘島！帰ってきーたーよ！」

甘島から歓迎を受けているような気がした。今日から私の新しい生活が始まる。

「さようなら、東京！」

もう一度大きな声で海に向かって叫んだ。

「こんにちはスイートアイランド！！尚、かえっーてき」

「邪魔だ！どけっ」

突然何かにぶつかられ、体勢が崩れて転んでしまった。そんな私の横を、台車を押した若い金髪の方が謝りもせず駆け抜けていく。

「ちょっと！何なのよ！」

どれだけ叫んでも若い金髪男はこちらをみようともしない。一心不乱に港に泊まっている漁船の方へと進んでいく。

「何なのあれ！許せない！」

自然とスマホを取り出し、隆一の番号にかけていた。

「もしもし、隆一！聞いてよ！」

「この電話は、お客様のご都合により」

聴きなれた機械的な声で我に返った。

「……島には嫌な人もいるんだね」

みんな人がよく優しい甘島、けども中にはやっぱり一人ぐらい嫌な人はいるんだ。けれどもエメラルドグリーンの海、この青い空をみていたらそんな些細なことなんか気にならなくなってくる。

「甘島これからよろしくね！」

もう一度お腹の底からの大声で叫んだ。

九月の半ばということもあり、南浜は観光客が一人もいなかった。東屋で水着に着替えた後、南浜で私だけのプライベートビーチを満喫した。泳いでいると私の足元をピンク色のかわいい熱帯魚が泳いでいた。少し泳いだ後、浜辺のデッキチェアに寝転がり穏やかに目を閉じた。

どれぐらい寝ていたのかわからないけれど、さっきと比べて太陽の位置が下がっていた。

「そろそろ行くか」

浜辺からの坂道を民宿へと向かって登る。背中から太陽がガンガンと照りつけてくる中、汗だくで重いスーツケースと一緒に歩いた。おじいに迎えに来てって頼んでおけばよかったな、そう思ったもののスマホの充電が切れていたことを思い出した。

十五分ほど歩くとやっと真っ白な星砂荘が見えてきた。暑さで星砂荘がゆらゆらと揺れて見えた。

「あと少し、頑張れ！頑張れ！尚！」

目指す星砂荘は坂のちょうど真ん中に立っている。外国の小さな白いお城のようなかわいい姿で、いつ見てもうっとりしてしまう。

門を開けると中庭で星砂荘のおじいがシーツを干しているのが見えた。久しぶりの再会に歓喜あまり、おじいの元へと手を広げて駆け寄った。

「おじい！久しぶり会いたかった」

「おお、尚ちゃん！久しぶりじゃな。よく来た！まずはパイナップルジュースでもどうじゃ？」

ってあの優しい表情で優しく迎えてくれるはずだった。

そこにいたおじいは険しい表情で私を睨みつけた。

「遅い！一時の船でくるはずや！何しとったんじゃ！」

「えっ……」

この間と違う声と表情のおじいを見て、もしかして違う人かなとも思ったけれども、この顔で、星砂荘だし……この暑さで少し機嫌が悪くなってしまったのだろうか。

「……南浜でね泳いで、少し休憩してたの。ほら見て少し焼けちゃったかな」

右腕をおじいに見せてみるが、おじいは相変わらず表情を一切緩めず私を睨みつけていた。

「観光客みたいなことしおって！荷物そこに置いて、早く手伝わんか！」

「えっ！？」

「早くしんか！！」

「は、はい」

おじいの余りの迫力に、そして想像と違う展開に、思わず泣き出しそうだった。

「早くしんか！」

涙をぐっところえてスーツケースを庭に置き、渡されたシーツを何とか竿にかけた。シーツを干すのは思いのほか、重くて大変だった。腕が痛い。

ようやく何十枚とあるシーツを干し終わると、全身汗でびしょりと濡れていた。気持ちが悪い。せっかくの南浜でのリラックスが台無しになっていた。

「……やっと終わった」

縁側で何だかよくわからない緑の野菜を紐でつるしていたおじいは、これを見逃さなかった。

「遅い！ちんたら干しやがって！」

汗で背中がべったりと濡れ身体と服がべったりと一体化している。気持ちが悪くて仕方がない。

「ねえおじい、仕事もう終わったからシャワー浴びたいな」

「……ふざけた事いいおって！……お前がちんたらちんたら干しおったけん時間かかったんじゃ！そんな甘いこと言うなんて信じられんじゃ」

「……すみません」

まだよく目の前の事が受け止められなかった。久しぶりに部長に怒られた時の気持ちを思い出す。そういえばこの間、部長が怒られたときはごめんなさいじゃなくてすみませんでしたって教えてくれた。

「次は買い物行ってこい！」

「えっ！」

買い物は大好きだから心が弾んだ。ようやく一息つける。車に乗り海沿いをドライブしながら

らスーパーへー……。

けれど現実には違った。ボロボロの地図を持たされ、星砂荘とマジックで車体に書いたボロボロの自転車で乗り、島の集落へと続く坂道を懸命に登った。坂道は登っても登っても坂は続いていた。

こんなに長かったかな。前は隆一とレンタカーで登ったから、知らなかった。

「三十分以内にもどってこんと、罰金五百円じゃからな」

出発する時のおじいの言葉が頭に張り付いて離れない。

漕げども漕げどもさとうきび畑が広がっていて集落なんか見えてこなかった。

こんなに体力を使ったのは人生で初めてかも……

頭がくらくらする。何回と何十回とペダルを漕ぎ、ようやく集落が見えてきた。あの日と同じく集落の入口には三件のお土産物屋があった。

「あっ、ここ！」

サトウキビを食べさせてもらった後、店内に入ってみると、虹色に光る貝のアクセサリ、水牛のぬいぐるみ、星砂のキーホルダー、白くて大きな巻貝、かわいいおみやげ物が沢山あった。

思わず歓声をあげた私を見て隆一は笑った。

「尚、見てみろよ！この貝のピアス虹色に光って綺麗だよ」

「わぁ本当だ！」

隆一が虹色のピアスを私の右耳に当てると、おばあ達はくしゃくしゃの顔をさらにくしゃくしゃにして言った。

「綺麗じゃ、それ鮑の磨いたやつじゃけんお守りにもなるんよ。すごく似合っとるよ。こんなに似合う人滅多におらんじゃ」

「そうかな……」

「そうだろ！尚意外に似合う人いないよ。おばあ、じゃあこれ下さい」

隆一が買ってくれた貝のピアス、今どこにあるんだろう……。引越しの時に荷物を片付けても出てこなかった。せっかく隆一に買ってもらったのはいいものの、一度も袋から出していなかった。一度も役目を果たしていないピアスが急にかわいそうになってきた。今一体どこにあるんだろう。

そんな事を考えながら、お店の前を必死に通り過ぎようとしたその時、ちょうどおばあが店から出てきた。

「あっ、おばあ！」

久しぶりの再会の嬉しさで、大きく手を振る。自転車の漕ぎをより一層強いものにした。しかしあの日のおばあさんの優しい表情とは正反対のものだった。眉間にしわをよせてずっとこっちを睨んでいる。

「うめさん、はらさん、ちょっと来て」

おばあがそう叫ぶと、隣とその隣の店からおばあが出てきた。

自転車がおばあ達の所によやくたどり着くと、おばあ達はさらに怪訝な表情で、大きな声のヒソヒソ話を始めた。

「星砂荘の自転車に乗っとるな」

「東京から来た新しいバイトらしいの」

「いつまで島におるじゃろな」

上から下まで私を値踏みでもするかのような厭らしい表情で見渡しひそひそと話している。

私はようやくおみやげ物屋のおばあ達が、私を快く思っていないということを受け入れることができた。

「どうして……？」

前はいんなに優しい顔していたおじいも、ニコニコしていたおばあ達もまるで別人だ。

「あんなスカートはいて、島に男さ漁りにきてるじゃ」

相も変わらず聞こえてくる言葉を背に、自転車で再びこぎ始めた

「ワシらにあいさつもなしに行くんじゃか」

信じられない言葉が聞こえてきて、思わず自転車の漕ぎを止めた。おそろおそろ後ろを振り向いた。

「……こんにちは」

言われた通り挨拶をしたが、おばあ達はそれを無視し、なかったことにした。

「これだから東京もんは、挨拶さえできんなんて、どういう教育受けてきたんじゃ」

どうして？挨拶しろって言うから挨拶したのにそれをなかったことにした。意味不明すぎる。

逃げるように通り過ぎ、集落にある唯一の食料品店に駆けこんだ。

案の定、お店のおばあも八月にきた時とはまったく違う。星砂荘の自転車を見ると、急に無愛想になった。あんなにいい笑顔だったおばあが今は笑顔無くレジを打ち、乱暴に袋詰めし私に渡した。

星砂荘への帰り道、来るときはあんなに苦労した坂道を今度は自転車を漕ぐことなく一気に下る。汗を絞れそうな位、濡れているワンピースと強烈な下り坂の人工的な向かい風のコンビが、快適のラインを通り越し、南極にいるみたいに体が凍えた。

「遅い！十五分遅刻じゃ！罰金五百円、給料からひいておくじゃ！」

ようやく南極から脱出できたと思ったら今度は鬼の門番がいた。玄関先ではおじいさんが恐ろしい顔をして待ち構えていた。

ここで私はようやくこの島に来たことを後悔しはじめていた。けれども私には帰る場所もなければ、帰るお金もない。

ここから先の出来事は忙しくてよく覚えていない。料理の下ごしらえに洗濯、掃除、お客さんが来てからは接客、前回泊まった時におつりが違ったというクレームの処理までさせられた。私、関係ないのに。

星砂荘は私とおじい以外に働いている人がいなかった。たった二人だけでこの民宿と併設の居

酒屋をまわそうとしていた。

当然のように居酒屋の开店準備をも手伝わせ、気が付くと時計は午後六時を指していた。食器磨きをしながら、台所で大根を切っているおじいに聞こえるように大きな声で呟いた。

「東京じゃあ、もう会社から帰ってる時間なのに」

「余計な事しゃべる暇があるじゃ、さっさと仕事せんか！」

全く意味がなかった。東京じゃ五時に帰ることができてたのに……

その時だった。入口から三人の顔の濃いお客さんが入ってきた。地元のお客さんのようだ。

「いらっしゃい！」

今まで黙々と料理を作っていたおじいが急に威勢よくなった。

「何、ぼさっとしてるんじゃ！このあほだれ！お客さんに挨拶しんか！」

また、おじいに怒鳴られ、頭の中であるおばさんを思い出した。前の前の派遣先の渋谷の会社で利用したパワハラ相談室の優しかったおばさんだ。けれどもこの島に相談室がない。どこに行けばこのひどいパワハラを訴えることができるのだろう。

「……いらっしゃいませ」

「もっと元気よく！」

「い、いらっしゃいませ」

そうこうしてる間にお客さんは次から次へと入ってきた。外はいつの間にか真っ暗になっている。お客さんは観光客一割、地元のおじさん九割といったところ。

三十分ほど経つと、店内はほぼ満席に近くなった。とにかく忙しい。猫の手でも借りたい。そんな忙しさの中でも入口に近い所に座っている八人のグループがとにかく目立っている。なぜかというところにかく下品だった。何か本能的に私の嫌いセンサーが発動している。大声で本島の風俗店の話をしたかと思えば、村のだれそれがセックスレスだの、とにかく品がない話をリーダー格のおじさんが大声で喋っている。そして周りの取り巻きがそれを聴いて爆笑するっていう不快極まりないものだった。

本当にこういう人たちは大嫌いだ。

「二番テーブルにピザとポテト持ってって」

おじいが焼きそばを片手に作りながら、指示する。

嫌だなと思ったけれど、また怒鳴られるはもっと嫌だった。

「……はい」

しゅしゅそのグループに近づくと、その中にどこかで見た顔があった。昼間、港でぶつかってきて、謝りもしなかった、失礼極まりない金髪の男だった。金髪の男は笑うわけでも怒るわけでもなく隅っこでひたすら生ビールを飲んでいる。

絡まれないように、絡まれないように、神様にお願いしながら料理を出す。

「お待たせしました。魚介盛りだくさんピザと、抹茶ポテトです」

けれどもそんな私の気持ちとは裏腹に原始人一同は好奇の目で私を見ていた。

リーダー格の中年男が台所のおじいに大声で尋ねる。

「おじい！この女、新しい子？」

おじいが急に笑顔になり、エビを焼きながら答える。

「そうじゃ」

中年男は私を舐めまわすように見る。思わず後ろに後ずさりする。この中年男、よく見るとあの若い金髪男にそっくりだった。間違いなく親子なんだろう。親子そろって本当にろくでもない。

次の瞬間、東京都議会もびっくりの発言が出ることになる。

「姉ちゃん、いいおっぱいしとるの」

「ハッ」

ありえないぐらいのセクハラ発言に呆然と立ち尽くすしかなかった。

中年男はニンマリしながら手を伸ばしてきた。

「ちょっと揉ませろ」

「……えっ！」

実際痴漢にあったら身動きができない人が多いらしい。本当にそうだ。私も体が動かなかった。そうしてる間にどんどん中年男の手が伸びてくる。どうしよう！嫌だ！

「誰か助けて」

そう叫んだつもりでも、口は不思議と動かなかった。

次の瞬間、急に中年男の頭上から氷と水が降ってきた。中年男は何が起こったかわからない表情でびしょぬれになっていた。ふと横を見ると金髪男がお冷のグラスを逆さにして中年男の頭の上で持っていた。

「ワシに何しよっと！！」

中年男が頭から水をたらしながら叫んだ。すぐに店内は騒然となった。

数秒後、金髪男が中年男をおもいきり殴った。中年男は壁際に倒れ、隣の空機の椅子を巻き込みながら派手に転んだ。

「このエロ親父が！母ちゃんに言うじゃ！」

「なんだと！母ちゃんに言うなんて卑怯じゃ！！」

中年男が怒り立ち上がり、仕返しといわんばかりに金髪男の右頬をグーで殴る。鈍い音と共に息子が反対側の机に崩れ落ち、またしても派手に倒れ込んだ。

「やりやがったな」

そういうと息子がお父さんの左ほほを思いっきり殴った。

「おじちゃんも栄太ももうやめろ！」

一緒に飲んでいたサーファー風の若い男が必死に止める。

けれども喧嘩は止まらない。お互いにお互いを一発ずつ殴り倒れ込む。その繰り返しだった。大昔に見たホームドラマの一シーンみたいだった。店内はどんどんめちゃくちゃになっていく。店にいた大半のお客さんがそろそろと店を出て行く。

おじいは出ていくお客さんに謝罪し、レジでお金を受け取っていたかと思うと、すっ飛んで来

て信じられない一言を言った。

「お前のせいじゃ！体ぐらい触られたってどうってことないだろうが！」

私はよく意味が理解できなかった。

おじいはそう怒鳴るとすぐに、喧嘩を止めようとする原始人の仲間に加勢し、二人をなんとか居酒屋の外に追い出した。

「やっと帰ったじゃ」

おじいがそう呟くと、サーファーの男がおじいに深々と頭を下げて謝った。

この場にいる誰も私のことなんて心配していなかった。一番心配されなくちゃいけないのは、セクハラを受けた私なのに。信じられない。どうして誰も私のことを気にしないんだろう。

もう我慢できない。堪忍袋の緒がきれるっていうのはこういうことなんだろう。

「身体ぐらいついて……」

もう嫌だ……無理……すべてが嫌だ……この島なんか大嫌い！

「もう無理！」

大声で叫び身につけていたエプロンを派手に投げ捨て、ドラマのように出入り口から派手に走って出てきた。

出てきてすぐに、星砂荘の右隣に設置されているコーラが一本二〇〇円の自動販売機に隠れた。けれどもどれだけ待っても、誰も私を追いかけてくる気配はなかった。

この島は街灯らしいものがほとんどない。おまけに今日は曇っていて星や月さえろくに見えない。暗闇という言葉はこういうことを指すんだろう。所々に、厚い雲の切れ間から見える星の明かりでなんとか道を確認することができた。道がわかった所で、東京ものの私には、行くあてなんてどこにもなかったけれど。

昼間の坂道を下り、わき道にそれて歩く。しばらくすると昼間あんなにリラックスした南浜にたどり着いた。昼間と同じように浜辺のデッキチェアに腰をおろした。

「東京に帰りたい……」

あんなにも嫌いになったはずの東京が何よりも愛しかった。この島のたった一日の生活で今までの自分がどれだけ恵まれていたかがよくわかった。

きっとこれは神様が我侘だった自分に与えてくれた試練で……自分が今まで甘えていたことがよくわかる。わかったから神様、一秒でも早く、早く東京に帰らせて下さい……隆一に会わせてください。

隆一のやさしかった顔が思い浮かび、ポケットに入っていたスマホでまたかけてみる。きっとこんなにづらい目にあって隆一の良さを再確認させてくれたから、きっと神様は隆一につないでくれるに違いない。不思議とそんな自信があふれてきた。

「この電話はお客様の」

けれども、何回かけてもいつものアナウンスが流れるだけだった。

雲の切れ間に見える三日月を見ていると、今までの自分のしてきたことが思い浮かんだ。

私には友達という友達がない。男の人は好きだと言ってくれる人の方が多いけど、下心ありありだ。身の周りにいる女の子にはいつも「色目を使ってるだの」「男好き」「わがまま」とか悪口しか言われた記憶がなかった。今までの人生で唯一仲良くなれた気がした会社の女の子たちもあの有様だ。

どれだけ真っ暗な海に向かって祈ってみても神様はまだ現れなかった。

ポケットに入ってた財布の中を見ると千円札が一枚、あとは小銭が少し入ってるだけだった。この島から出る船の船代にもならない。

貯金も全部このマキシワンプイに使っちゃったし、クレジットカードはあの食事代八万円を払った後、全部処分してしまっていた。島では使える店がないと思ったから。

気が進まなかったけれど、たった一人の肉親であるお母さんの番号をおそるおそるおした。五回目ぐらいのコールの後で聞き覚えのある優しい声が聞こえてきた。

「もしもし、尚？どうしたの？」

久しぶりにお母さんの声を聞き、感情が抑えられなくなり思いっきり泣いてしまった。

「お母さん、あのね今、甘島に来てて、帰るお金がなくて、それで」

なんとか自分の今の状況を必死に訴えた。やっぱり最後に頼るのはお母さんなんだ。自分でも何を話してるのかよくわからなくなったけれど、とても困っている状況だっていうことは伝わってると思う。

「ウェン、ワン、ウェン、もしもし、お母さん？あのさ……」

けれども娘の私がどれだけ訴えても母の返答はあっさりとしたものだった。

「いいじゃないの。島でいい男見つけてきなさいね。あっ治夫さん、駄目」

「もしもし、もしもし？」

「ツーツーツー」

お母さんの事だから、また新しい彼氏でもできたんだろう……昔からそうだった。私にはぜんぜん構ってくれなくて男の人ばかり。男の人と別れている期間だけ、必要以上に私を構ってくれた。けれども長くて一週間。すぐに別の彼氏ができ、私なんかいなかったことになっていた。やっぱり人はそう簡単には変わらないだろう。

もうどうすることもできなかった。泣いても泣いても誰も助けてはくれないのをわかってはいたけれど、泣くしかできなかった。

穏やかな海風が涙を冷やしてはどこかへと消えていった。

どれぐらい泣いていたかわからないけれど、さっきと比べて月の位置があきらかに高くなっていた。私はこのままここで死ぬのじゃないだろうか。そう思うと急に色んなことが惜しくなってくる。トワイライトホテルのアイス食べてみたかったな。マローの新作パンプス履いてみたかったな。ディズニーホテルのスイートに泊まってみたかったし、隆一にももう一回会いたい。

「どうしたの？こんな所で？」

急に後ろから優しそうな女の人の声が聞こえた。振り向くとそこには肩ほどの黒い髪の毛に真っ白なワンピースを着たとても綺麗な女の人が立っていた。まさしく女神様みたいだ。神様は私を見捨てはしなかった。

「見ない顔ね。観光に来たの？」

女の方は私に合わせてしゃがみ、大きな瞳で私を覗き込んだ。

「あっ、あの、今日から星砂荘で働いてて……」

「ああ、東京から来たっていう女の子ね。でもどうしたの？そんなに泣いて」

この島でかけられた初めての優しい言葉に、もう気持ちを押し返すことができなかった。気がつくやうに女神様に抱きついて大号泣していた。

「島に来る前にお金全部使っちゃったの？……それで御両親は何て？」

「お父さんは会ったこともなくて、お母さんは今また新しい男の所にいて、島で男作ってこいて」

女神様もさすがに苦笑いを浮かべた。

「そっか……じゃあお友達は？」

「……昔から友達ってできたことなくて」

女神様は優しく微笑んだ。

「そうなの？ふふっ、私もよ、女の子って連帯意識が強くて嫌になっちゃう」

女神様の思わぬ告白に思わず白くて細い手を握り占めてしまった。

「そうなんです、初めて私の気持ちわかってくれた。私、東京に帰りたんです。今までのわがまま直して、人生やり直したいんです」

女神様は優しい笑顔で私の手を握り返してくれた。

「じゃあ、決まりね、早く東京に帰ろうね」

「はい！」

なんて幸運なんだろう。お金はまた東京から送ればいいのか、きっと今日は女神のおうちに泊めてくれるんだろう。ちゃんと住所聞いて、お礼とお金しっかり送らなくちゃ。神様、有難う。これからは人にわがまま言わない優しい人間になります。

けれども次の瞬間、女神の口から信じられない言葉を聞くことになった。

「じゃあ、星砂荘に戻ろう」

「えっ！？戻るっ！？」

「だって貯金もないし、頼れる人もいないんだから、星砂荘で働くしかないじゃない。東京だったら、ここから五万円くらいあれば帰れるし、全部で……四十万くらいあれば、アパートも借りれて、また元の生活に戻れるわよ。まあ三ヶ月働けばいいんじゃない」

女神様は残酷なことを平然と言いつつ放った。

「三ヶ月！……でもあそこ仕事キツくて、セクハラだし、パワハラだし、嫌で嫌でしょうがな

くて……私に合わないんです。三ヶ月もあんなところで働くなんて」

女神はそんな私をみて笑った。

「仕事なんてみんなきついよ。嫌なことたくさん言われたり、何でも自分のせいにされたり、嫌な人に頭下げたりね。でもね嫌なこと我慢して初めてお金をもらえるんだから」

「だって……」

「この島で野垂れ死にたいの？」

女神様はにっこり笑ってそう言った。私はその時女神の後ろに光がさした気がした。

女神様は、私の手を引っ張り立たせ、ぐいぐい引っ張って星砂荘への坂道を登っていった。

あれだけ賑やかだった星砂荘は嘘のように静まりかえっていた。店の大部分の電気が消えていて、奥の厨房の方だけが明るい。

ドアをガラガラと冴子さんが開けると、私を引っ張って中に入れた。

中ではおじいさんが一人で洗い物をしていた。

「おお。冴ちゃん」

「おじいちょっと頼みがあるんだけど」

そういうと冴子さんは奥に引っ込んでいった。おじいところちをみて何やら話している。

私は、という気持ちの置き場がなくて、壁に貼ってある「一円に泣くやつは一円に泣かされる」という標語をボーっと見ていた。

「おいで」

急に冴子さんが手招きをして、私を厨房まで呼んだ。

おじいが洗い物の手を止め、腕を組んで困った顔をしていた。

「こんな、何にも仕事出来ん奴、おいときたくないんじゃないけど、冴ちゃんの頼みじゃからな！三ヶ月！十二月の終わりまでじゃ！」

おじいが乱暴にそっくり捨てると、冴子さんが目で私に合図する。

「……あ、ありがとうございます」

冴子さんの言うように、嫌な人に深々と頭を下げた。

冴子さんはすぐに帰ってしまったけれども、私は仕事をしなくちゃいけない。

生きて東京に帰る為に。

おじいの言いつけどおりに居酒屋のすべての机と椅子をピカピカに磨き上げた。

おじいも皿洗いを終えたようでタオルで手を拭いている。

「今日はこれでおじまいじゃな」

おじいのこの言葉を聞いてその場に座りこんでしまった。

「疲れた」

こんなにも長い間、立っていたのは人生で初めてだった。

「従業員の部屋は一番奥の二〇三やからな」

おじいはそう言うと、小さなおぼんに入ったおにぎりとかからあげ、サラダをくれた。

「仕事は朝の十時から夜の十時までや、給料は一日八千円じゃ。そこから宿泊費二千円と朝昼夕食代千円引いて、一日五千円じゃ！月末に郵便局に振り込むからな。」

おじいが何を言ってるのかわからなかった。

「一日八千円もらえるはずじゃ……」

「何じゃ！文句あるんか？！」

「……ありません」

「そうか、じゃあ明日も朝十時にここに来るんじゃ！一分でも遅れたら五百円罰金じゃからな！」

それだけ言うと、おじいは奥にある別棟に行ってしまった。

なんとか立ち上がり、旅館の方へと向かう。膝が笑っているってこのことを言うんだ。

前に泊まった時は確か二〇二号室だった。綺麗なフローリングに大きなテレビ、ソファがあり、大きな窓からは青い空と海がよく見渡せた。

そんな記憶を思い出しながら、二〇三号室の鍵を開けた。けれどもそこには大きなアジア風のソファもベッドもなく、そこは四畳程の小さな和室に簡単なシャワーがついていた。今までのこともあるので、覚悟してたとは言え無性に切ない。二〇二号室とかろうじて同じだったのは、窓から海が見えることだけ。

押入れからぺちゃんこの布団を見つけ出し、思いっきりダイブした。

「……帰りたい、東京に帰りたい。おいしい物食べたいし、おしゃれしたい。隆一に会いたい。スイートアイランドなんて嘘！真っ赤な嘘！大うそつき」

涙が自然と溢れ出てきた。けれど冴子さんのあの一言が、頭の中で何度もリフレインされる。

「この島で野垂れ死にたいの」

だからここで働く以外に道はないのだ。

この島に来て三日が立とうとしていた。けれども三日経った所で、この島は何にも変わらない。相変わらずの蒸し暑さ、日差しの強さ、潮風で肌がべとべとする。一分でも外にいようものなら眩暈がして倒れそうになってしまう。そんな中、汗まみれになりながら中庭で大量のシーツをようやく干し終えた。と思ったら、後ろからおじいの声がした。

「おい尚、昼の定期船から荷物受け取ってこい」

この暑さの中で港まで行って、また地獄のような坂を登って戻ってこなくちゃいけないなんて。信じられない！ありえない！

「えっ、こんなに暑いのに」

思わず口答えしてしまい、しまったと思っても、もう遅かった。

「あたりまえじゃ！文句言うなら出てくんじゃ！」

いつも通りの台詞が返ってきた。おじいの言う通り、私は文句なんか言える立場じゃないんだ

。なんとかしてお金を稼がなくちゃいけない。

「……はい、わかりました。」

渋々、自転車を奥から出して、一気に漕ぎ出そうとすると後ろからおじいの叫び声がある。

「三十分で戻ってこれなかったら罰金五百円じゃからな。」

「……はい。」

一日八千円で食費と宿泊費三千円を引いて実質一日五千円。朝の十時から夜の十時まで休みなく働いて、五千円。時給に直すといくらになるんだろう……。

朝十時から夜の十時までは一、二、三…何時間あるんだろう。計算できない。先生の言う通り、しっかり学校で勉強しておけばよかった。真剣に心配してくれる中学校の時の先生に「学校で習うことなんか、将来何に使うの？」と言った自分を蹴り飛ばしたい。

しかも罰金で五百円も引かれるなんて……鬼だ。

このボロボロの自転車の性能を考えて、出せる限りの最大のスピードを出し、一気に坂を下る。強烈な暑さが涼しく感じ、やがて寒さを感じる頃、ようやく港についた。自転車を止め、船着き場を見渡したが、観光客はおろか漁船しか見えなかった。船が少し遅れているのだろう。自転車を止め、船着場まで歩く。

突然、漁船から怒鳴り声が聞こえてきた。振り返るとあの金髪男が、中年男に殴られ、アスファルトの上に無造作に置かれた網の上に倒れこんだ。

「大事な網になにしよっと！もうお前なんか船に乗せんじゃ」

そう言い残し、船は無情にも出発してしまった。金髪男は起き上がるとすぐに船に向かって大声で叫んだ。

「すみませんでした！乗せて下さい」

けれども船はどんどん沖に出ていく、姿が見えなくなっても金髪男が深々と頭を下げている。私は衝撃の光景に目が離せなくなっていた。

「ドラマみたい！」

思わず漏れ出た声に金髪男が振り向いた。しまった。どうやら聞こえてたらしい。

「……何で殴られても、謝るの？あのおじさんひどくない。暴力振るわれたって訴えればいいじゃないの」

「親父じゃ」

金髪男が気まずそうに言った。そういえばそうだった。三日前に居酒屋に来てたときも思ったけれど楸似だ。

「お父さんなのに、どうしてあんなに謝ってなのに許してくれないの」

「……少しのミスが命取りなんだよ」

金髪男が不機嫌そうに吐き捨て、足ものと網を台車に乗せ、漁港の建物に向かって走りだした。

金髪男に何故だか妙に親近感が湧いてくる。みんな、つらくてもお金を稼ぐために仕事してるんだ。 台車を押す後姿に向かって叫んだ。

「お金稼ぐのって大変だよな！私も仕事頑張るから」

そう言うと金髪男はこちらを振り返った。

「.....お前、本当にアホダラじゃ」

「アホダラ！？」

ほぼ見ず知らずの他人に、おそらくばか者と言われ、無性に腹が立った。

「何よ！どこがアホダラなのよ！あんただってその金髪なんとかしなさいよ！ドキョンみたいじゃないの！」

金髪男は私の罵声に振り向くことなく、相変わらずの怪訝な表情で漁協の建物の中に入ってしまった。

予定より五分遅れた定期船から荷物を受け取ると、鬼のような登り坂を自転車を押しながら行く。汗が目に入って激痛を感じる。前がうまく見えない。太ももを使いすぎて一歩踏み出すごとに痛みを感じた。

「やっとついた」

星砂荘の庭先に自転車をなんとか必死に止め、庭に倒れこんだ。

「おい、ほら水、飲むんじゃ」

おじいに渡された水が今まで飲んだ飲み物の中で一番おいしく思えた。目を閉じながらでも、この島の太陽ははっきりと見えた。

「はあ」

大きく息を吐き、中庭に寝転んだ。やりきった！汗でびしょりだけど不思議と達成感がある。働いたって気がする。

「約束の時間から、三分過ぎとる。五百円罰金じゃ」

あまりの仕打ちに思わず飛び起きた。

「えっ、こんなに頑張ったのに！それでも罰金なの？」

「頑張っても結果が伴ってないじゃ」

おじいはひょうひょうと答える。

「次は郵便局行ってくるんじゃ。」

「えっ！こんなに疲れてるのに！もう無理！！」

そう叫ぶとおじいの顔がまた厳しく変わった。

「だったらやめてもいいんじゃぞ！」

「.....行きます。行ってきます。」

限界まで疲れた体を奮い立たせて、立ち上がった。

おじいが奥からダンボールを三箱持ってきて、私の自転車になにやらくくりつけている。「星

砂荘自慢の魚の干物じゃ。しっかり発送してくるんじゃぞ。みんな楽しみに待っててくれるんじゃ」

おじいが満足げに、箱を見ている。

「干物……」

箱を良く見ると長野、埼玉、岐阜へと行くらしい。魚の干物なんて、あんなおいしくなさそうなものどうして欲しいんだろう。

「ほらっ、ぼーっとしとらんと、早く行ってくるんじゃ！」

「……はい」

渋々、自転車を押して坂の上目指して漕ぎ出した。

後ろからおじいがなにやら叫んでいる。

「おい！三十分以内に戻ってこんど」

言いかけたおじいの言葉を遮った。

「わかってます！五百円の罰金でしょ。いってきます！」

郵便局は坂を登り切り、集落のはずれにある。けれども、さっき大仕事を終えたばかりの私の足が途中からもう動かなかった。

自転車を降りて、後ろから押した。ダンボール三箱が乗った自転車は、普段の倍以上はありそうだ。、太陽が私の背中をじりじりと照り付けている。私を後押ししているのか、邪魔をしているのかわからないけど。

さっき飲んだ水が汗で体の外に出て行ってしまった頃、例のお土産物屋が見えてきた。

気付かれないように首にかけたタオルで顔を隠し、早足で店の前を通りすぎるけれど、星砂荘とでかかたと書かれた自転車が私の居場所をおばあ達に知らせていた。案の定こちらを見て三人で何かを大声で喋っている。

「また来たんじゃ」

「男に貢いで借金こさえて、星砂荘のおじいに金で買われたんや」

「まあ、いやらしいな」

自分の想像を絶するくらいの悪口が言われていた。ひとつだけ反論するんなら男に貢がれたことはあっても決して貢いだことはない。それにおじいの愛人になった覚えもない。

自然と涙がほほを伝った。けれども反論する元気もなく、顔を下げたまま走って通り過ぎた。

タオルで汗と涙を一緒に拭きながら小学校の前を通った。小さな男の子達が三人で校庭のブランコで遊んでいるのが見えた。子ども達が無邪気に遊んでいる様子を見ると何故だかほっとした。私も頑張らなくちゃと自然と思え、大きく息をすった。空は青い色で後ろを振り返ると坂の下にエメラルドグリーン的大海が見えた。

突然、足に何か強い衝撃を感じた。後ろを振り向くとさっきの男の子達の一人が無邪気な顔で石を私めがけて投げようとしている。他の二人も今にも参戦しようと石をポケットから出そうとしていた。

「くらえ！」

見事に私の左ふくらはぎに石が命中する。

「ぎゃ！」

思わず自転車ごと道路に倒れそうになったのを必死でこらえた。この荷物を落とすわけにはいかない。これ以上罰金を増やすわけにはいかない。

「あいつ、あれぐらいの攻撃で倒れそうじゃったわ」

子供たちは嬉しそうにこっちを見て笑っていた。何なの？田舎の小学生のくせに……絶対に許せない。自転車をしっかりと安定した場所に止めた。

「何してるのよ！」

ありったけの大声で叫ぶ。

「しゃべったじゃ！」

子ども達はひるむことなく、なおさら面白がっている。

「あいつ、売女ってゆうんじゃ！昨日ばあちゃんが言っとった」

とんでもない言葉に目の前がクラクラした。

会ったこともしゃべったこともない人が私の悪口を言っているこの現実……。

「私だって好きでこの島にいるんじゃないわよ！」

「だったら早く帰るんじゃ！東京もんは東京へ帰れ！」

「出てけ！島から出てけ」

この島の人たちは大人でも子どもでも、言う事は同じだった。

「出てってやるわよ！」

そう言った次の瞬間、一番大きな体格をした子供の投げた石が私の右膝に勢いよく当たり血が吹き出た。

「痛い」

思わずその場に座り込んだ。なんでこんな目にあわなくちゃいけないんだろう……

「ヤベえよ！血がでたけん！」

「やりすぎじゃ！」

「だってお前が」

さっきまで威勢の良かった子供たちが急に弱気になっている。今が反撃のチャンスかもしれない。

けれど、もう立ちあがる気力なんてなかった。限界だ。子供までこの島の人達は腐っている。お金の為に頑張ると決めたけれど、もう無理……。

その時だった。遠くから女の人の声が聞こえた。

「女の人に何しよっと」

「優子ねえだ、逃げろ！！」

小学生達は一目散に逃げていく。

「待ちなさい！今度はあんた達も同じ目に合わせてやるけんね！覚えておくんじゃ！」

振り向くと女の子が腕を組んで立っていた。その子は二十歳前後で変わった外見をしていた。この島には似合わない、金髪で髪の毛もグルグルに巻き、つけまつげと太いアイラインというギャル風のメイクだ。

ギャル風の子は私に優しい笑顔に向けた。

「大丈夫じゃった？」

「うん、多分……」

「観光客の人？ごめんね。ずっと前じゃけど、あの子達のおとうが東京の人にだまされかけて。じゃから観光客の人のことあんまりよく思っとらんよ。じゃからあんなことするんけ」

ギャル風の子は外見とは随分違う、屈託のない笑顔だった。ふとギャル風の子が私の乗っていた自転車に目を向けた。

「あれ？星砂荘？」

やばい……逃げなくては。また売女やら、出てけやらひどい悪口を言われちゃう。おそろおそろ逃げようとする、ギャル風の子は私の肩をがっしりと掴んだ。

「ちょっと待って！もしかして星砂荘で働いてるっていう東京の人じゃけ？」

「……うん、そう」

やばい、叩かれる！証拠はないけれど、今までの経験上、確かにそう思った。

けれども現実には予想をはるかに超えている。そう言った途端、ギャル風の子の笑顔がさらに明るくなった。

「じゃああなたが！」

彼女の眼がダイヤモンド並みの輝きをはっして、私にさらに詰めよってきた。

「東京ってやっぱり、毎日合コンするの？」

「……毎日ってわけじゃないけど週一回ぐらいかな」

「本当？いいなーじゃあさ芸能人とやっぱり会ったりするんじゃ？」

「道を歩いてて会ったことはないけど……ドラマの撮影とかはたまに」

「すごい！！すごい！！」

まるで私が有名人かのように彼女はキャッキョッキョ喜んでいる。

「あっこれかわいい！！」

彼女は私のポケットからはみ出していたスマホを見つけた。

「何これかわいい！！デコってる」

まだ何が起きているかよくわからなかった。彼女は敵だろうか？味方だろうか？

「……アルタにある店でやってくれる」

「アルタ？！って新宿にあるビルの？！」

「うん。」

「いいけん！私も東京行きたいじゃ！！けれどお兄とおとうに反対されて一回も行ったことないじゃ」

彼女が寂しそうに呟いた。

彼女はもうやら敵ではないらしい。少なくとも東京って言葉を聞くと顔をすぐにしかめる

島の人とは違う。

「ねえ名前なんて言うの？」

彼女がまた人懐っこい笑顔を私に向けた。

「大西、大西尚」

「じゃあ尚ねえって呼んでもいい？」

彼女はそう言う私の手をとって大きな瞳で見つめてきた。私はいままで一度も呼ばれたことのない名前に少し戸惑っていた。

「……いいけど」

「私ね、金城優子」

「優子ちゃん……」

この島の人には私や東京が大嫌いなはずなのに、大好きな人がいる。私は何とも言えない不思議な感情になった。けれどもすぐに思い出した。私には大事な用事がある。

「あっ、時間が、行かんと！優子ちゃん、助けてくれて有難う！」

そういい、慌てて自転車の後ろのロックを右足で蹴ると、後ろから優子ちゃんの元気な声が聞こえてきた。

「尚ねえ、後でメール教えてね」

驚いて、後ろを振り向くと優子ちゃんが屈託のない笑顔で手を振っていた。

午後十時、一日の仕事がようやく終わった。自分の四畳の部屋にようやく戻り、ひきっぱなしだった布団にダイブする。

これだけ働いても一日五千元……。ふと横を見ると隆一からもらったマローの靴が目に入る。確かこの靴三十万円くらい……

何日働いたらこの靴が買えるのだろうか。計算はできないけれど、果てしなく働かなくちゃいけない。

隆一にこんな高い靴買わせちゃった。おまけにいらなくて……今更、後悔しても遅いけれど、過去の自分の行動が恨まれてしょうがなかった。

スマホをポケットから取り出し、チェックするけれど、どれだけ見ても今日も隆一から何の連絡もなかった。

「隆一……あっ！」

隆一とつながってたもう一つの手段を思い出す。スマホを取り出し、大昔に登録したっきりの自分のSNSを見てみたけれど、もうそこにはあるはずの隆一の名前がなくなっていた。

「隆一……」

いつか隆一が見てくれた時の為に日記を書こうと思った。

この三日間の苦労や隆一への謝罪をずっと書き綴った日記だった。こんなに長い文章を書いたのは生まれて初めてかもしれない。

隆一が何かのきっかけで見てくださいように。

思いを書ききった後に携帯のホームボタンを押すと南浜の画像が出てきた。今は南浜を見ても癒されない。どうして南浜をホーム画面にしていたのだろう。

ホーム画面を大好きな東京タワーの写真へと変えた。今はスカイツリーだっていう人が多いかもしれないけれど、私にとって東京タワーは小さい頃から見続けた特別な場所だから。

東京タワーを見ていると不思議と疲れきった体が元気になるような気がする。いつかまた東京タワーが毎日見える生活に戻れますように。

いつのまにかシャワーもせずにそのまま眠ってしまった。

神様のプライベートビーチ

島に来てちょうど一週間。けれどもこの島に慣れるわけなんてない。

昼間は蒸し蒸しと暑い。体に海の潮風がねっとりと絡みつく。夜七時を過ぎるとようやく窓から涼しい風が入ってくる。今までの暑さが嘘のように大人しくて涼しい風、きっと窓を開けて星空を見上げながら寝ると気持ちがいいだろうな。

けれども、現実はこの小さな喜びを楽しむ余裕すらない。仕事が終わって部屋に戻ってくると、いつ寝たかさえもわからない。あっという間にまた強烈な日差しが朝を知らせてくれる。毎日その繰り返しだ。働いても働いても島を少し歩けば、悪口を言われ、おじいにはいつも怒られる。いつまでこんな日が続くのだろう。

けれども今日はいつもと違った、窓越しに入ってくる強烈な朝日もなぜか心地よく感じてしまう。

今日は週で一回しかない、唯一の休日だからかもしれない。

「やっぱりもったいない！」

布団から飛び起き、急いで服を脱ぎ捨て、水着、ラッシュガードを着て、シュノーケルセットをスーツケースから探し出す。この日の為に見つけた、とっておきの場所に行く為。

自転車を押しながら坂道を登ると集落が見えてくる。集落を超えると、一面に広がるさとうきび畑が風でゆらゆらと揺れている。細い道をずっと奥まで行くとうっそうとした熱帯雨林が出てきた。熱帯雨林の隙間にうっすらと細い道がある。

はみ出ている小枝にぶつからないようにそっとそっと歩く。五分ぐらい歩くと急に視界が開ける場所がある。今までのジャングルがなくなり、青い空、青い海に白い砂浜が一面に広がった。

思いっきり青い空へ向かって服や靴を脱ぎ捨てた。この為暑いのを我慢して水着を下に着てきたんだから。

「尚のプライベートビーチ！」

白い砂浜から飛び込むように海に入る。

「ハッポー」

透明な水しぶきが空高くまで飛んだ。目を閉じて全身の力を抜く。水面に浮きながら瞼の裏から太陽を感じた。今までのストレスで貯めこんだ黒いものが胸の中から消え去っていく気がする。

「はぁ……デトックス」

気持ちがいい。もう最高の気分。

「何しとんじゃ！」

突然の怒鳴り声で、バランスを崩し海に沈みそうになり、鼻から海水が入ってしまった。立と

うと体勢を変えようとするが……足がつかない！いつの間にこんなに遠くに流されてしまったのだろう。浜辺がはるか遠くに見える。

「はあ、はあ、ゴホン、ゴホン、助けて！」

意識が遠のく……冴子さんの顔が急に浮かんだ。そうダメ、こんな所で野垂れ死にたくはない。

「何考えとるじゃ！東浜で泳ごうなんて！」

誰かの怒鳴り声が聞こえて目が覚めると、私の周りにびしょ濡れの四人位のおじさん達が集まっていた。

みんな凄く怒っているのが伝わってくる。遠くに目をやると次から次へと人が集まって来ている。集まってくる人達はみんな怒っている。しかも相当だ。

頭にハチマキを巻いたおじさんが、頭がクラクラして倒れそうなくらいの大声を出す。もう倒れているんだけども。

「東浜で泳ごうなんて、何考えとんじゃ！！！！」

あまりの大声に思わず飛び起きた。

「……えっ、なんで？だって……海だからいいでしょ。」

私がそう言うと、おじさん達、みんなの目がさらに鬼のようにつりあがった。

「ここは神聖な場所じゃ！この海に人が入るなんて絶対許されんのじゃ！」

私はびしょ濡れのおじさん達を見て言ってしまった。

「でも……おじさん達も今入ったでしょ？」

一瞬の戸惑いの後、さらにおじさん達の怒りに火をつけてしまった。

「そりゃ、お前を助けるためじゃ！東京もんは何考えとるんじゃ」

「頭弱いけん」

「信じられんじゃ！このバイタが！」

ひどい罵声を浴びせられる。これだけの人数に囲まれ罵声を浴びせられるなんて。

その時だった。急に訛りのない言葉が聞こえてくる。

「もういいだろう。知らなかったんだから」

島の人が一斉に声の主を見た。

「武！」

私もつられて見ると、サーファーっぽい雰囲気のある男の人が割って入ってきた。どこかで見たことがある……。

金髪男やエロ親父と一緒に店に飲みに来たり、漁協で働いている人だった。武さんって言うんだ……。

武さんはこちらに軽く手をあげ、ニやりと笑った。一番激しい罵声を浴びせてきたおじさんに向かって語りかける。

「おっちゃんだって、飲むとよく自慢してるんじゃない。中学生くらいの頃にさ、ここで泳いでやったって。それともあれ嘘なの？」

それまで般若の顔で怒っていたおじさんが、急に下を向いた。

「それは……中坊じゃったからじゃ！よく意味がわかってなかったからじゃ」

「この子だって一緒だよ。よくわかってないんだよ。これでわかったからもういいじゃん。さあみんな早く帰って帰って」

武さんの正論に急に勢いがなくなり、すごすごと島の人達は帰っていく。

「今度泳いだらただじゃおかねえじゃ」

一番怒っていた、ハチマキおじさんもそう言い残し、帰って行ってしまった。

「あの……ありがとうございました」

武さんは、またニツと笑い浜辺に無造作に脱ぎ捨てられた靴を拾い、砂を払った。

「ラッシュガードなんか着ても靴を履かないとサンゴで足傷ついちゃうよ。」

優しくそう言うと靴を私の足の前にそろえて置いてくれた。

武さんのさりげない優しさにうるっと来る。

「有難うございます。神聖な場所だって知らなくて、怒られちゃった。」

武さんがまたしてもニツと笑い黒い素肌に白い歯が目立った。

「ごめんね、この村の人達はさ、結構島の外の人間をよく思っていない人が多いんだよ。いい人も多いんだけど、そうじゃない人もやっぱりいるからさ。まあ、俺はこんな綺麗な女性なら大歓迎なんだけど。」

武さんキザな言いなりに思わず笑ってしまった。武さんも金髪の前髪の後ろに隠れた目が優しく笑っていた。

バイクの音が遠くから聞こえ、振り向くと茨道を原チャが走ってくるのが見えた。

「栄太！」

武さんが大きく手を振る。栄太って言う知り合いらしい。栄太は浜辺の直前で原チャを止めヘルメットをとった。

「あっ！」

心底驚いた。栄太はあの金髪男だったからだ。

「武兄！こんなところで何しとんじゃ！さっきおじさんが呼んどったじゃ。」

「いけね！頼まれたの忘れてた！また怒られちゃう」

「こんなところで東浜で泳いだやつに構っとるからじゃ」

栄太の大きな一重の目がさらに大きくなった。どうしてついさっきの出来事をもう知っているのだろう。もしかして島の人達は全員小型無線が洋服に装備されてるに違いない……何なのよ！この島は！

「……泳いだら駄目なら最初から看板立てておきなさいよ」

無性にイライラして栄太に向かって吐き捨てた。

「……お前やっぱり相当馬鹿じゃ」

「馬鹿って何なのよ！ちゃんと理由説明してみなさいよ！」

「そんなもんちょっと考えればわかるんじゃ」

武さんが私と栄太の間に割って入った。

「まあまあ、栄太、尚ちゃん何にも知らないんだからさ」

「尚ちゃん？」

「武さん、どうして私の名前知ってるの？」

栄太が小馬鹿にしたようにフンッと笑った。

「有名じゃからな。星砂荘で働いてる非常識な東京もんって」

「……やっぱりそうなんだ」

わかってはいたけれど私、この島では相当な有名人らしい。

「尚ちゃん、ここはさ平たく言うとこの村の神様が住んでる海なんだよ。村の人達にとっては、命に代えても守りたい大事な場所なんだよ」

「……そうなの？だからみんな怒ってるの？」

今までそんな大切な場所だなんて一つも知らなかった。村の人達があれだけ怒るのも理解ができるような気がするし、プライベートビーチなんて言っている自分がなんか恥ずかしかった。

「どおりで、あそこの大きな岩に神社の縄みたいなのついてるって思った」

武さんがまたニッと笑った。

「でしょ？さすが尚ちゃん、かわいいから気がつくのはやいね！」

「えへへ、そうかな？うん、ありがとう」

久しぶりの男の人の優しさに自然と笑顔になった。東京じゃこんなこと当たり前だったのに。

武さんの隣にいる栄太は、呆れかえった顔をして私を見ていた。

武さん達と別れ、今日はもう自分の部屋に帰ることにした。帰り道はとっても楽チンだった。自転車を漕がなくても、行きで頑張った分の坂道の貯金でスーッと降りることができた。しばらくすると、いつものお土産物屋さんが見えてきた。嫌な予感がするけれどここを通らなければ宿には帰れない。ラッキーな事に店の外には誰もいなかった。

「よかった」

気がつかれないようにそっと通りぬける。やった！気づかれなかった！

そう思った次の瞬間またいつもの声がする。

「来たけん」

手前にあるお土産物屋のおばさんが急に店から出てきた。それを合図にして残りの二つの店からもいつものおばさんが出てきて、大声で叫び始めた

「東浜に入るなんて許せんやつや！」

自転車で全速力で走りぬける。

「神様を冒瀆しとる！ さっさと東京に帰れ！」

後ろに何か粉みたいなものを投げつけられ、少しだけ背中にあたった気がする。

もしかして……塩？

私だって帰れるもんなら帰りたい。けれど帰れないのだ。泣いているのを誰にも見られないように顔を下げると涙が自転車の速さで飛んでいった。涙の向こう側にうっすらと星砂荘が見えてきた。

ようやく二〇三号室に帰ってくると、布団にダラッと寝ころんだ。楽しい休日だっていうのに全然楽しくない、むしろ嫌な休日だった。

休日って今まで何してたんだろうな……隆一と一緒に横浜にドライブに行ったり、ヒルズで買い物したり、おいしいレストランに行ったり楽しかったな。

その時、急に部屋の戸がガラッと空いた。あまりのことに驚いて飛び起きると、そこにはこの前よりさらに短いスカートを履いた、優子ちゃんが笑顔で立っていた。

「尚ねえ、見てこれ！！」

突然の来訪にうまく頭がついていかなかった。

「優子ちゃん……」

「ちゃんなんて、優子でいいから」

優子は満面の笑みで答えた。

「じゃあ……優子、人の部屋に入る時はノックぐらいしてよ！」

きつめの口調でそう言うと優子は捨てられた子犬のような表情になり、今にも泣き出しそうだった。こんな表情されたら誰だって何にも言えなくなってしまう。

「……いいよ。今度からしてくれればいから。そんな顔しないで、何を見れないの？」

すぐに優子の表情が元通りに明るくなった。

「これ！」

言われるまま優子に手渡された物を見た。私と色違いのスマホだった。

「さっきね、本島に買ってきたの！ 尚ねえとお揃い！！仲良し！」

本当に嬉しそうな優子を見て正直驚いた。だって私は今まで女の子に好かれた事がないからだった。

この島の人達はとても極端だ。たいていの人は私のこと大嫌いなのに、大好きって言ってくれる人もいる。この島にはどうでもいい人という分類は存在しないのだ。

優子に一通りスマホの使い方やアプリを教えてあげると、優子は午後六時を知らせる島の防災無線のサイレンと共に帰ってった。優子のお家は相当厳しいらしい。

優子が帰った後、何故か寂しくなり、SNSを覗いたけれど、この間の日記に隆一はおろか誰ひとりとしてコメントを残していってくれていなかった。でもまた懲りずに書こうと思う。

隆一がいつか見てくれる時の為に。今の私にできるただ一つのこと。

部屋の奥にあった鞆の中からマローの靴を取り出すと、マローの靴は私には似合わないくらい綺麗な色をしていた。

「隆一、わがままばかり言ってごめん」

そう言うと、隆一に届くはずのない「ごめん」は、マローの靴の輝きに跳ね返って、どこかに消えてしまった。

外ではコバルトブルーの空がゆっくりと綺麗なピンクに変わっていこうとしていた。

島のお祭り

九月も終わろうとしているのに相変わらずの強烈な朝日が顔に当たっている。足元にあった布団をかぶり、顔を隠そうとしたけれど、逆に暑くて我慢ができない。一週間ぶりの待ちに待った休日のはずなのに、いつもと同じ時間に目が覚めてしまった。

先週の休日は神聖な海で泳いで怒られ、塩まで投げつけられた。どうせ今日も外に出ても何もいいことがない。一日中、目を閉じたまま布団にごろごろしていようと思う。

次の瞬間、部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

慌てて起きようとしたが寝起きでうまく行動がついていかない。目が上手に開かない。何者かに布団を急にはがされた。

「早く起きて！」

ようやく目を開けると、そこにはどこかで見覚えのあるおばさんが立っていた。向かいのレンタルサイクル屋、波の家のおばさんだ。

「……人の部屋に入るときはノックぐらいして下さい……」

私の抗議なんか気にもせず、おばさんは話を続ける。

「あんた、今日何の日か知っとるんじゃ？」

「……えっ、お休みの日？」

おばさんは首を左右に振りながら派手にため息をついた。

「これだからもう。今日は祭りじゃ」

今の状況に体がついてきた。ようやく体を起こすことができた。

「祭り……じゃあ、後から見に行こうかな。でも浴衣持ってきてないや。」

「何言ってるんじゃ！すぐに着替えて下の調理場に来るんや。いい？ただでさえ人出が足りなくなってるんじゃからね。あと百秒以内に来るんや」

おばさんはそう言うと、急いで階段を降りて行ってしまった。

突然の展開に頭がついていかなかったけど、階段の下から本当におばさんがカウントダウンしている声が響いていた。

カウントダウンって不思議だ。何か行かなくちゃ行けない気になってしまうから。中学卒業以来、初めてすっぴんで部屋の外へ出た。勿論パジャマ代わりに使っているジャージで。

私、この島に来て、女子力が落ちに落ちまくってるかも。ふとそう思ったものの、足取り重く階段を降りていった。

調理場でレンタルサイクルのおばさんがが懸命に黒い団子を作っていた。

「はい早く手洗って」

何がなんだか分からないまま手を洗い。お婆さんの隣に立つ。

「真似して作ってみるじゃ」

お婆さんの言うとおりに見よう見まねで右手に団子の塊を取り、左手でこねる。けれどもできたのは球体からははるかに遠いアメーバーみたいな物体だった。

「もう、しょうがないじゃ、団子も満足にできんのじゃね。」

お婆さんはそう言う私の塊を左手にとり、上手に右手を動かして作ってくれた。私も見様見真似で黒いものを左手にとり右手で優しくなでた。すると球体に限りなく近い物体になったような気がする。

「お婆さん、見て」

「いいじゃないの。上手になってきたじゃ！」

お婆さんに褒められとてもうれしかった。人に褒められるのなんて何年ぶりだろう。

それから一時間ぐらい、お婆さんと黙々と団子を作った。以外に団子作りがとても楽しかった。ついにボールの中の最後の塊をお婆さんが手にとり、黒い塊がなくなった。

「やった！終わった！」

「よく頑張ったわい」

お婆さんがそう言って笑ってくれた。

何ていうか……凄い……達成感。

これでようやく部屋に帰ってもう一度ゴロゴロすることができる。思いっきり背伸びをしたら大きな欠伸がでた。

「次はお赤飯の準備ね」

「えっ……」

お婆さんは、どこからか馬鹿でかいボールに入ったほくほくの赤飯を持ってきている。お婆さんが作った見本の通りにパック詰めする。

「いいじゃない、うまいじゃ」

「えへへ、そうかな？」

お婆さんはほめ上手だ。ちょっとした事もすぐに褒めてくれる。なんかそれが嬉しかった。

そうこうしているうちにあっという間に赤飯も出来上がった。作った団子やら赤飯やらを波の家のワゴン車に乗せると、ワゴン車はあっという間に集落へと走り去ってしまった。

星砂荘に入ってみると、人の気配が全く感じられなかった。どうやらおじいもどこかに出かけているらしい。お客さんも誰一人としていない。こんな日もあるんだな。

中庭の縁側に座り、お茶を飲みながら一息ついていると、冴子さんが門から入ってきた。

「尚ちゃん、お米、届けにきたわよ」

「あっ冴子さん」

最近知ったのだが、冴子さんは島の人達にお米を届ける仕事をしている。いつ見てもあんなに華奢なのに、三十キロはあるお米を軽々と持ち上げる姿はカッコいい。

「元気にやってる？」

「なんとか、やってる」

冴子さんはコメ袋を縁側にドシッと置く。こちらを振り返りニコッと笑った。

「良かった。今日、一年に一度のお祭りなんだ。夕方七時から東浜でやるよ。見においでよ」

「東浜！？」

「そう、尚ちゃんが泳いじゃった、あの場所よ」

冴子さんはまたニコッと優しい笑みを浮かべた。やっぱりこの島の人達は洋服に小型無線をつけてあるのだろう。そうに違いない。

「尚ねえ、おはよう！」

玄関から優子の声が聞こえた。

「優子？今日お祭りなんですよ？」

玄関に向かって大声で叫ぶ。

「なんだ知ったの？今日もうお客さん来ないけん。一緒に行くんじゃ！」

優子は私のもとに走り寄ると、右手を子供のように引っ張る。

「あっちょっとまって今……」

辺りを見渡すといつの間にか冴子さんはいなくなっていた。急ぎの仕事でもあったのだろうか。冴子さんって不思議な人だな。

優子と一緒に南浜に行き、クラブミュージックを聴いたり、スマホのアプリを教えてあげたりしていた。ふと浜の端の方を見ると、何やら黒い大きなものが動いているのがわかる。

「何じゃ？あれ？」

二人でおそろおそろ近づいてみると、黒い布を持った小太りの男が浜辺に右半身だけつけ、寝転んでいた。そして手には一眼レフを持っている。

この島にも不審者？！

「ああ！一郎さん！」

優子が大きな声で手を振り上げた。

「一郎さん！？」

一郎さんは急にびくっとなり、大げさに浜辺に転がった。

「わああ！！！」

「わああ？」

私はいい歳した小太りの男が、こんなにも大げさに驚いていることに衝撃を受ける。

「一郎さん、いつも大袈裟じゃけん」

優子はそう言って笑った。

「いやあ、まさかまさか！優子さんが声かけてくれたから、思わずびっくりしちゃいました」
そう言って一郎さんはポケットから取り出したハンカチで、額の流れんばかりの汗を拭いた。

正直、「うわぁ、気持ち悪い」と心の中で叫んだ。

「あははっ！きもいじゃけん」

優子は笑顔で正直に思ったことを言った。私はそんな優子にびっくりする。

「また、優子さんひどい！」

一郎さんは大好物を貰ったタヌキのように笑った。

「ところでそちらの方はどちら様ですか？」

「そちらの方って、ああ、尚ねえのこと？」

一郎さんの細い目がさらに細くなった。

「ああ……あなたが噂の……」

一郎さんは明らかに急にテンションが下がった

「尚ねえ、一郎さんはね、こう見えて横浜出身なんじゃよ」

横浜って聞いた瞬間、急に一郎さんに親近感がわく。今まで0どころかマイナスだったのに。

地方出身の人達が、同じ県だった時に、あんなに盛り上がっていた理由がやっとわかった気がする。自分の家族に会ったような、そんな気持ち。不思議とほっとするのだろう。

そして優子の話によると一郎さんは驚くことにリュウキュウヒメアオイという蝶の研究をする為にこの島に住んでいるらしい。この島の小学校の先生として。

「この島は最高です！りゅうきゅうヒメアオイの天国です！いいですか！聞いて下さいよ。まず個体は」

一郎さんが難しい話をし始めたけれど、右から左に出ていっている。私はこの島に魅力を感じて好きで住んでいる人がいるってことに衝撃を受けた。そんなに蝶がすきななの？どこがいいの？こんな島？

ありえない。

「一郎さん、わかったけん。あっ一郎さん今日祭りの後、お父さんが家で飲もうって言ったよ」

「またですか？けども優子さんの頼みなら行きます。じゃあ用意してきます」

一郎さんはそう言うとながら走ってどこかへ行ってしまった。

いつの間にか太陽が遠くに見える島に隠れようとしていた。あの島は北甘島という島で、この島よりはるかに大きいリゾート島らしい。全然知らなかった。優子は今度買い物に行こうよと言っていた。二人で取り留めのないことを喋りながら、夕日を二人でぼーっと見ていた。

急に優子が私の手を引っ張った。

「そろそろじゃけん、尚ねえ、行くよ」

夕焼けの空を背に優子は力強く私の右手をひっぱって、どんどん坂道を登っていく。東浜へと

続く道には、続々と島の人達が増えてきた。意地悪な小学生もお父さんお母さんと一緒に、島のお金持ちのサトウキビ畑のオーナー、島の漁協で働いてる叔母さん達、島の宅配便の人、おじい、おばあ達、皆同じ方向を目指して歩いていく。気のせいか皆ウキウキしていて、普段よりもオシャレをしている気がする。

この間まで鬱蒼と木々が茂った道は、誰かの手によって綺麗な道へと舗装されていた。ジャングルを抜けると白い砂浜に雲ひとつない夜空が広がる東浜に着いた。

海は静かで波一つ立っていなかったけれども、空の満月の光が岩を照らし、岩から漏れた光が真っ暗な海に反射して辺り一面に満月の光を拡散していた。

優子がスマホを見て時間をチェックする。

「まだ、時間あるじゃけん、祭りのこと教えてあげる」

優子に手を引かれ、東浜のはずれにあるプレハブ小屋に連れていかれる。

「ここでみんな準備するけんね。天狗様は島の若い男が踊るけん。ほら見て、あの人が今年の天狗じゃけんよ。上手じゃけんよ」

窓から中を覗くと、あの栄太がなにやら赤い着物を身にまとい、天狗のお面をつけ、が何回も何回も舞を踊っている。栄太を見守る他の男の人たちの眼光がとても鋭い。

急に武さんが立ちあがったのが見えた。

「よし、今のいいぞ！それで行こう！」

他の男の人達も次から次へと立ち上がる。さっきまでの様子が嘘のように優しい表情だ。真剣なお祭りなんだ。祭りって言うと花火大会と屋台っていうことしか今まで知らなかったから、新鮮だった。

「尚ねえ、はじまるよ！行こう！」

優子が強い力で左手を引っ張り、みんながいる場所に戻ってきた。

浜辺では莫蔭が引いてあり、前列には初老の男の人達が座り、順におばあ、おじさん、おばさん、若い人というように年齢順で座っている。私達はというと当然のように後ろの方で立って海を見ていた。

海に映った月がちょうど縄のついた石と重なった。

次の瞬間、前列の中心に座っていた白髪のおじいさんが大きな貝でできた楽器を吹き、辺り一面に船の警笛のような音が鳴り始めた。

前列の男性達が何やら呪文を唱えて祈っている。その後ろを島民達が囲むようにして祈っている。会場にいる誰もが呪文を唱えている。よく聞き取れないけど、情熱的な呪文を唱えている。もちろん隣の優子も。

しばらくすると、カラフルな衣装をつけた男達が浜辺の最前線にでてきた。中心に赤い着物を着た栄太がいた。何やら外国語のような言葉を叫び、島の人達も手を合わせ一斉に何かを唱える。

十分後ぐらいだろうか、天狗様が満天の星空に向かって、海の岩場に向かって、何かを叫んだ。

それを合図として男たちが木琴のような木琴じゃないような不思議な楽器でメロディーが奏でる。五分ぐらい続いただろうか……おじい達が演奏をやめ、天狗様がまた何かを叫んだ。島民たちも続きみんなで一斉に言葉にならない言葉を叫んだ。

島民達の顔が急に穏やかになり、場の空気が一気に緩やかなものになった。島のおばあ達が麦酒を持ってきて皆に注ぎ始めた。

私は何だかよくわからないけど涙が出てきた。

「よかった。よかった」

そう呟いていると、いつも買い物に行く無愛想な売店のおばあが私をみて笑った。

「そんなによかったじゃか？」

「うん。ひっくひっく」

涙と鼻水がよくわからないくらい泣いていた。口の中がしょっぱい味がする。

麦酒や飲み物、おつまみを配っていたおばあ達が私の周りに集まってきて、そんな私を見て笑った。

「これで涙ふくんじゃか」

おばあ達の顔はさっきよりしわくちゃになっていた。

「これでも飲みなさい。落ち着くけんな」

おばあのかくれた甘酒みたいなお酒に満月が映りこみ、綺麗だった。おちょこに口をつけ一気に飲んだ。なんだか自分でもうまく説明できない。けれど、とっても感動しちゃった。何だろうこの気持ち。だんだん体が熱くなってくる。

「尚ねえ、大丈夫？ふらふらしとるよ」

優子の声が遙か遠くから聞こえてくる。

「大丈夫！私お酒強いんだから」

私を心配そうに見つめる優子の顔がやけに印象的に残っている。そこから先の記憶はあいまいにしか思い出せなかった。

「尚ちゃん、大丈夫？どうして泣いてるの？」

遠くから武さんの声が聞こえる。

「オイッ、オッ、オッウッ」

けれどもこの気持ちは誰にも止められなかった。泣くのをとめられない。

「何でこの女ここまで泣いとるじゃけん？」

多分、この声は金髪男の栄太だ。けれどもそんなことはどうでもよかつ

「感動したんじゃって」

「偉いわ。この良さがわかるんじゃ。こんな若いじゃけん」

遠くにおばあ達の声が聞こえる。

「しばらく寝かせといてあげようか」

武さんの声が聞こえる。そう、その通り、そうして欲しい。流石は女の子の気持ちが一番わかる武さん。

次に目が覚めたら。誰かの背中の上だった。

「……ここは、どこ？」

「尚ちゃん、やっと気がついた？」

隣を武さんが歩いていた。

「優子は？」

「優子はもう家に帰したけん。嫁入り前の娘がこんな時間まで出歩いとったら危ないけん」

私をおぶっている誰かが言った。よくよく見るとその誰かはどうやら栄太らしい。

誰かの古風な着信音が鳴った。着信音一ってやつかな。古風な着信音とは正反対の武さんの携帯だったらしい。

「もしっ！はい、はい」

武さんが先に行ってという合図を送る。

「女か、今度はどこの島の女じゃ。」

栄太がそう言うと、何故か少し腹が立った。

「違うわよ！武さんはああ見えて一途に一人の人を愛し続ける人なんだからね」

「お前まさか、もう武兄とおぼこいことになったんか？」

おぼこいが何を意味してるのかわからなかったけれど、ニュアンスでわかる。

「違うわよ！武さんはね、瞳の奥の輝きがちがうもん。チャラ男じゃない！絶対に一人だけを愛してるの。きっと特別な人がいるのよ」

「へえ」

栄太が空返事をしたのが悔しかった。

だって武さんは、私の周りにいた軽い男達とは何かが違うからだ。うまく言えないんだけど、目が全然違う。

「そういうあんたこそ怪しいのよ。っていうか私のことどこに連れてくつもりなの？変体！お

ろしてよ！」

「うるさか！俺だって好き好んでお前おぶっとるわけじゃなか！けど、優子が必ず星砂荘へ送ってけって言うからじゃけ」

栄太はそう言うと大きなため息をついた。

「えっ、じゃあもしかして、あんた優子のこと好きなの？」

「……お前の頭は恋とか愛とかしかないんじゃないか？」

栄太が半分呆れながら言った。

「失礼しちゃうわよ！……まあ、確かにそうかも……」

栄太の言うことは当たっている。自分で振り返っても、私には恋とか愛とかが人生の全て、かもしれない。それ以上のことは思い出そうとしても思い出せない。

今の私の全ては隆一だ。こんなに愛してるのに。

「……隆一、メール返してくれないし、もう駄目なの」

思わず、呟いた一言が隆一を余計に恋しくさせた。

「そんなもん、無理じゃ、誰がプレゼント気にいらんっていう女好きなんじゃ。お前みたいな女、男はみんな好かん」

「……ひどい！！っていつか何で隆一のこと知ってるの？」

「知らんけん。島中の人知っとるじゃ」

「だって私、隆一の話したのは、武さんと、冴子さんと、優子と、星砂のおじいだけなのに！」

「十分じゃわ」

栄太が軽く鼻で笑った。栄太に笑われ、私のプライドが傷ついた。今までは男に鼻で笑われるなんてなかったのに。

「……私、東京にいた時にはモテたんだからね！あんた知らないでしょ！」

「ここは東京じゃなか、甘島じゃ。ここはお前みたいな女はみんな好かん！」

「……知ってるよ……隆一、シクシク、会いたい……」

栄太に現実をつきつけられる。東京じゃあんなにチャホヤしてくれたのに。この島の人たちは「かわいい」とか「きれい」を勘違いしている。

「どれだけ泣いても隆一が会いにくる事なか、早く金貯めて帰れ！」

栄太はそう言うと大きなため息をついた。

「何よ。早く出て行ってやるわよ。こんな島……三ヶ月の辛抱！十二月にはもう東京に帰れるんだから。スイートアイランドなんて嘘！ガイドブックにも乗せてるけど大嘘！全然甘くもないしおいしくもない。アイスっぽい名前つけて、若者呼ぼうとしたって無駄なんだからね」

「お前……本当に馬鹿じゃけんな」

栄太は心底呆れている顔をした。

「失礼！意味も無く馬鹿ってすぐ言う。もう嫌だ！」

「アイランドって書いてアイランドって読むんじゃ。スイートアイランド、日本語にすると甘島じゃけん。何も嘘なんてついとらんけん」

「……ええ！そうなの？アイランドって読むの？知らなかった」

衝撃の事実。穴があったら入りたいくらい恥ずかしさを覚えた。どうして真面目に勉強してこなかったんだろう。

栄太は何も答えずにもくもくと道を歩いていく。遠くの方に星砂荘が月明かりに照らされているのが見えてきた。

ふと栄太を見るとの背中がかなりの汗をかいているのがわかった。

栄太が足元の石につまずき少しよろめく。いくら好きな子に言われたからって、人間一人をおぶって歩くのは大変なんだろう。栄太の背中の中の汗が、自転車であの坂を登る自分と重なった。

「ねえ、重いでしょ、ありがとう」

せっかく私がそう言ったけれど、栄太は何の反応もなかった。お礼をいったのに無反応なんて本当にムカつく。

栄太の背中をぼーっと見ていると、金髪の髪の毛を月が照らして、栄太の髪の毛がライオンみたいに光っていて面白かった。

あーあそれにしても飲みすぎた。気持ち悪い。